

初午と火祭

初午の日と粕壁宿の市の日が同日のとき、粕壁では火防祭りが行なわれていた。この行事はいつのころから始められたかは詳らかでない。粕壁宿の六斎市。『史料によると慶長十六年（一六一一年）より市株を取り立て開かれたとあるが開かれる四と九の日に当たる日が、その年の初午の日と同日になる年は、宿内に火災が多いと昔から伝えられていた。

江戸では、酉の市の日が三の酉まである年は火災が多いと伝えられているのと何らかの因縁があるかとも考えられる。

初午の日と市の日が同日になるのは何年目か何十年目かにおとずれる。この日が初午の日（三月四日または三月九日。…これは旧暦の二月で行なっているため新暦になってからも一カ月おくれの三月としていた。現在は初午も二月に行なわれるようになってきている）になる年は、六斎市の取締をする者と、下組の代表者が市神様として祀っている。

一宮町歩道橋際の八坂神社（牛王天王社ともいう）の境内に集まり、社前に仮設模型の家を造り神前に供物をして、祝詞を奏上し火防を祈願してその家に御神灯を移してその家を焚き上げる行事が行なわれていた。この行事は、市神様にその年の災いを除いてもらい安泰であることを祈願するもので六斎市の関係者と八坂神社の宮元である新々田組（現一宮町内会）総代が行なってきた行事である。

戦後、昭和二十二年頃まで行なわれていたが、それ以後は経済状況も変化して、宿の市も衰微してこれらの伝統も薄れてしまい行事も行なわれなくなって、いまでは忘れ去られてしまった。

市史編さんのため近世の古文書を解説している中に、文政二年の粕壁宿名主が、書き残した宿日記の中から、このことについての記事が発見された。

当二月四日当宿初午ニ相当旧例にて火祭致来候所、数十年無之義候故種々催有之所（中略）九日市日ニ興行宿役人立会花麗不相成様行いたし候右祭ハ市宮前ニ小屋を造り神ニ祈念いたし小屋ニ火ヲ懸可申町々之者共最勝院境内一同集り居同所并源徳寺東陽寺ニて早鐘をつき候を合図に走り出し小屋を打破火をしめし引取候

筈一組にて行列して纏をふり措子乗等いたし来候所下組組行列宿中不行届候迎最勝院詰合候節右之通りとてにい
たし引取を町内限り引入候様いたし候とある。

文政二年（一八二〇年）以前は宿中あげての行事であったのを新々田組限りとしたとの文面である。

また粕壁宿内では、四と九の日いわゆる六斎市日の日に若し火災があると大火になると云う言い伝えがある。

古老の話では、市日の災害については非常に恐れていて、その日に災害が発生した時は各家は大戸を降し
て沈黙し、災害除けをしたと云われている。

※春日部市粕壁東三・二・十九

粕壁小学校第三校舎内 市史編さん室 （電話 〇六一 六四四二番）※₁

初出「広報かすかべ 昭和五十六年二月」かすかべの歴史余話

※₁ 掲載当時のまま作成しました。市史編さん室は、春日部市教育センターで活動しております。（平成二
十八年十月現在）